

## 宇宙の音楽のトランスポジツィオーン

——J. ラッツィンガーと「危機 Krise」の時代の教会音楽——

清水康宏

本論文は、ベネディクト 16 世（在位 2005-13）として第 265 代ローマ教皇を務めたヨーゼフ・ラッツィンガーの 1970 年代における教会音楽論を取り上げ、彼が教会の歴史上つねに「葛藤」のあった典礼と芸術との関係をどのように神学的に総括し、その「葛藤」を乗り越えようとしていたのかを考察するものである。

ラッツィンガーは、会衆による典礼への「行動的参加」が謳われた第二バチカン公会議の後、芸術的価値を問わない実用的な（皆が歌えるような）歌曲が典礼にふさわしく、芸術的で荘重な教会音楽はふさわしくないと考える傾向があることを問題視していた。彼にとって教会音楽とは、会衆のために作られた易しい「実用音楽」ではなく、またエリートだけが理解できるような「秘教的」な「芸術音楽」でもない。それは「宇宙」に秘められた神の賛美である「宇宙の音楽」が、典礼において達成される「トランスポジツィオーン」によって、耳に聞こえる感覚的な「人間の音楽」になったものである。それは、目に見えない精神的な神が、目に見える肉体を持った人間としてのキリストの姿に描かれるというアイコンと目的を同じくするものであり、教会音楽でもアイコンでも、精神的なものが感覚的なものへと置き換わること、つまり「受肉」としての「トランスポジツィオーン」が実際にそこで行われているのである。彼にとって教会音楽は、単に人間の手による生産物ではなく、「宇宙の声」を呼び起こそうとする典礼に対して天上からもたらされる「贈り物」である。

ラッツィンガーにとって典礼と芸術との関係を考えることは、精神的なものと感覚的なものとのつながりをどのように捉えるべきかという教父の時代から続く神学上の核心的な問題を考えることであった。ゆえに、彼の教会音楽論に着目することは、現代文化とどのように折り合いをつけるかが問われた公会議後の神学と典礼のあり方を見ていくうえで有益である。